



説教要旨「それでもまだ負けてない」

ルカによる福音書 23章 50～56節

ルカによる福音書は、いわゆる“立派”な人物としてアリマタヤ出身のヨセフを紹介しています。彼は「善良な正しい人」で、「神の国を待ち望んで」いて、イエス様の亡骸を引き取り、墓に葬ります。しかし彼は、「議員」でした。彼はユダヤ人の最高決定機関である最高法院の一員です。最高法院の議会は、イエス様をメシア僭称者としてローマに引き渡すことを全会一致で採決しました。ヨセフは「同僚の決議や行動には同意しなかった」(51節)とあるものの、その決議に反対をしていません。ヨハネによる福音書はこのヨセフについて、「イエスの弟子でありながら、ユダヤ人たちを恐れて、そのことを隠していた」(ヨハネ 19:38)と記しています。

このアリマタヤのヨセフは決して、“立派”な人物ではなかったと言えます。少なくともこのヨセフ本人は、自分のことを立派な人間だとは思っていませんでした。イエス様の弟子でありながら、最高法院の議員の一人として、イエス様の正しさを訴えることをせず、イエス様が十字架につけられ、侮辱され、殺されるのを黙って見ていたのですから。しかし彼は、イエス様の亡骸を引き取るのです。それは、自分がイエス様の仲間であることを公にする行為です。それまでイエス様の弟子であることを隠していたヨセフは、イエス様が殺されてはじめて、自分がイエス様の弟子であることを明かしたのです。それが“いまさら”の行為であることはヨセフ自身が痛いほど感じていたことでしょう。

わたしたちのために命を惜しまず捨てられたイエス様に、なにひとつお返しできていないわたしたちです。しかし、まだなにも終わっていません。一度は完全に絶たれてしまった神様とわたしたちの関係をイエス様を取りなして、修復してくださいました。そして、わたしたちの救い主は、死に打ち勝ち、復活してくださるのです。この主の復活こそがわたしたちの希望です。どんなに“いまさら”に思えたとしても、遅すぎることはありません。わたしたちのために復活してくださった主に、精一杯の愛を献げる歩みへと踏みだしましょう。

(2021・4・18 説教者：稲垣真実)